「静大で真面目な合コン」での出会いと、そのあとの軌跡

▸▸▸▸ 織田さん（静岡大学情報学部１年）の10カ月間のチャレンジ

「静大で真面目な合コン」イベントでの出会いと、そのあとの軌跡 ～静岡大学情報学部１年　織田悠斗さん編～

2024年4月に静岡キャンパスで開催した、学生と地域団体・NPO・企業とのマッチングの場「静大で真面目な合コン」に来てくれた織田さん。この日、２つの団体とのマッチングが成立し、活動に飛び込みました。その後、活動の場を広げながら、自分が本当にやりたいことを形にする準備ができてきたと言います。ここまでの約１年間にどんな活動をしてきたのか、どんな発見があったのかを語ってもらいました。

2024年4月のイベントの様子。やや緊張しながら団体の話しを聞く織田さんの後ろ姿

出会いと活動の展開

真面目な合コンイベントでは、誰とどんな出会いがありましたか？

■東伊豆フィールドワーク

静大東部サテライトの内山先生や、４年生の松永さんと出会い、伊豆でのフィールドワークや静大と松崎町の住民による「松崎プロジェクト」についての説明を受け、活動の面白さを教えてもらいました。

■大井川一滴の旅プロジェクト

NPO法人ソラノワの紅林さんと出会い、大井川での活動後押しをしてもらいました。

■しぞーかわかもの図鑑プロジェクト

ふじのくに未来財団の須田さんと出会い、学生チームでの活動の機会を頂きました。

――この日から約１年間、どんな活動をしてきましたか？

上で挙げたみなさんと一緒になって、大井川でのインタビュー活動、しぞーかわかもの図鑑プロジェクトで取材・編集活動、東伊豆フィールドワークなどで、地域に入って行きました。

またそれ以外の活動では、静大の学生起業家育成プログラム「MOVE ON」や学生が思いを形にしてプレゼンする「東海学生AWARD」などのプログラムに参加しました。自分の中で大きなテーマである「祭り」に向き合い、地域の祭りを残していけるプロジェクトの発表などを行いました。

しぞーかわかもの図鑑プロジェクトのみなさん（右から２番目が織田さん）

活動する中での悩み

――活動する中で悩んだことはありましたか？

対人関係スキルの悩みがありました。いろいろな機会を頂いて、その分野の最前線で動く人の話を聞くことができたりしましたが、どのようなことを質問したら良い話を聞くことができるかわからず、対談などは手探り状態でした。モチベーション面でも悩んだことがあり、様々なプロジェクトに関わり学びや楽しさを感じる一方で、やらないといけないことが増えてしまい、勢いが下がってしまう時期がありました。

――その時、どうやって乗り越えましたか？

キャパオーバーになってしまっていたので、目の前の小さなことを意識してとにかくタスクを溜めないようにしました。例えば書類やプレゼン資料の作成と、溜まっている連絡への返信などのタスクがあるときは、まず連絡を返して目の前のタスクを減らすようにして、切り抜けました。

発見や気づき

――現場で体験している中で、どんな発見や気づきがありましたか？

活動はインタビューやフィールドワークを行いましたが、そこでたくさんの人と出会い、その人の生活や思いを聞くことができました。特に印象的だったのは

活動のフィールドとなった大井川の風景

大井川流域に住む方のお話で、大井川で体験した幼少期や戦争時のエピソードは、大井川上流の特別な環境を表した話だと感じ、自分の出身との大きな違いを感じました。

――どんな違いだと感じたのですか？

大井川の真ん中にある大きな岩から水に飛び込むという話にはワクワクしました。また周りが山に囲まれた地域だからこそ、地区内や地区間でのやり取りが盛んで深い交流があるという話は、この地域ならではだと思いました。自分の住むところは平地であり比較的新しい町で自然で遊んだり町同士でのかかわりがあまり盛んではなかったので、話しを聞いて驚きました。

さらに大井川鉄道の使用していない駅が町の方の憩いの場となっていて、そのような場所で交流をするということ自体も新鮮で面白いと思いました。

――忙しく活動しているようだけど、どうやってタイムマネージメントしていますか？

まず考え方として、断る理由（距離・時間面、金銭面、スケジュール面）がないイベントにはとりあえず行ってみるという考え方でいろいろなプロジェクトにチャレンジしています。予定を立てたイベントは、確定でなくてもカレンダーアプリに記入してすべて可視化するようにしています。移動時間がかかる際はそれも考慮してあるので、予定を忘れたり漏れていたりすることがなくなりました。

自分に起きた変化

――以前と比べて、自分はどんな風に変化したと思いますか？

とりあえず行ってみる、やってみるというように行動力がついたと感じています。

また、世の中のいろいろな物事で気になったことがあれば、誰がどのように動いて成り立っているのか想像して考えるようになりました。自分でプロジェクトを考えてみたからこそ、今世の中にある仕事や事業がとてもよく考えられて成り立っているように見えて、洗練されていてすごいなあと思います。勉強になるし、そんな世の中って素敵だな、と思います。

――「静大で真面目な合コン」は、織田さんにとってどんな場でしたか？

自分がやりたい活動をそっと後押ししてくれるような場だと思います。真面目な合コン以降もいろいろな場所に行きましたが、そこではすでにいろいろな活動をしている人が多かったり、熱量の差があったりしました。真面目な合コンは出入り自由で、まだ何もしていない人でも気になったブースに行くだけで新しい世界や活動を知れるので、「なにかやりたいという気持ちはあるけど、まだなにもやったことがない・・・」という人にとっては、これ以上なく参加しやすいイベントだと感じました。

東海学生アワードでの発表の様子

これからの挑戦

――これから挑戦したいことはなんですか？

祭りの課題を解決するプロジェクトに取り組んで、祭りを専門に扱う会社を立てたいです。

人口減少や高齢化によって町の人だけでは祭りを維持できない地域が増えています。これからは町の外から来る人を担い手として積極的に受け入れていく必要があり、外部参加者の受け入れ体制を整えることが祭りの課題だと考えています。具体的には、次回の祭り開催が危ぶまれているような地域で、外部参加者と祭りの出会いの機会を作って新しい人の流れをその町にもたらす構想です。

「一滴の旅」プロジェクトで取材した、地域の祭り

学生へのエール

――いいですね！織田さんが地域に飛び込んでいく姿が目に浮かぶようです。では最後に、何かチャレンジしてみたいと考えている学生へのエールをお願いします！

実際にいろいろやってみて、こんな世界があったんだ！と驚くような活動が沢山ありました。

それぞれの現場や活動に楽しさと学びがあるので、まずは自分の「やってみたい！」に従って一緒に挑戦していきましょう！

【編集後記】
織田さんは、「しずはま起業部」（浜松キャンパス）の部長に就任したとのこと。新たにチャレンジしてみたい学生で、特に浜松の方は、ぜひそちらものぞいてみてください。静岡キャンパスの方は、チャレンジ2030マネジメントチームが随時マッチングをおこなっていますので、相談してくださいね。